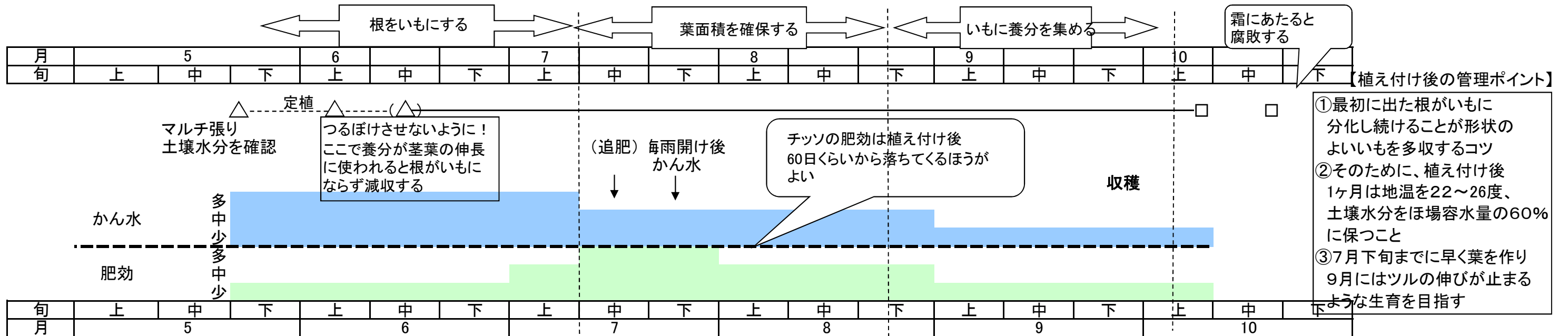


さつまいも栽培ごよみ



今年の目標：発根力のある良い苗を植えてしっかりと活着させよう！

| 昨年の課題 | 原因 | 対策 | 具体的には |
|-------|---------------------|-----------|--|
| 収量の減少 | ①地上部の生育量の不足 | ①初期生育の確保 | ①優良苗の確保。採苗2～3日前に液肥を葉面散布する ②採苗は晴れた午後(3時頃)に行う ③干害の発生が予想される場合は、植え付け方法(直立植え)、取り置き苗等に対応する |
| | ②着いも数の増加によるくずいもの増加 | ①挿し苗方法の変更 | ①節がつまり、短い苗は埋まる節数が3節となるように、植え方(直立植え)を工夫する |
| | ③植え付け時期の遅れに伴う生育日数不足 | ①生育期間の確保 | ①植え付け時期が遅い場合(6月中旬)、直立植えとして着いも数を制限し、肥大を促す。 ②挿し苗後130日を確保してから収穫する。 |

1 品種 ※表の数値はH21の調査データ

| 品種名 | つる長 cm | いも重 g | 上いも数 50g以上 | 収量性 kg/10a | A品率 |
|-------|-----------|----------|---------------|---------------|-----|
| 高系14号 | 114 | 740 | 3.0 | 2038 | 67% |
| べにはるか | 130 | 420 | 4.8 | 1157 | 54% |
| ベニアズマ | 292 | 760 | 2.8 | 2098 | 79% |

- (1)高系14号 西日本の主力品種で、貯蔵性にすぐれるが、ウイルス病、サツマイモネコブセンチュウに弱い。高温に強く主に砂丘地で多く栽培される。
- (2)べにはるか 新品種でセンチュウや立ち枯れ病に強い。短期間で粘質化し、甘みが強い。貯蔵性に優れる。着いも数が多い。丸いもの発生が多く、収量の約30%程度発生する。
- (3)ベニアズマ 食味と果色に優れるが、貯蔵性に劣る。掘り遅れると形状が悪くなる。

2 畑の準備

- (1) pHは5.5以上であればよく生育する(酸性土壌に強い)
- (2) 苦土石灰、かんしょ専用肥料を全面散布(量は施肥例を参考に)し、できるだけ深く耕耘する。
- (3) コガネムシ類の対策として、植え付け時に粒剤を施用する
- (4) 土壌水分があるときに、うね立て、マルチ張りを行う
- (5) 普通掘り栽培では無マルチ栽培も可能だが、雑草対策や乾燥防止のためマルチ栽培が有効となる。マルチ下の水分が少ないと、胴太りやさめ肌状の表皮異常の発生が多くなるので土壌水分がある内にマルチを行う。マルチとうね面はできるだけ密着させる。

3 うね立て、マルチ

栽植密度の目安

| うね幅(cm) | 株間(cm) | 植え付け本数 |
|---------|--------|--------|
| 110 | 27 | 3367 |
| 110 | 30 | 3030 |
| 110 | 33 | 2755 |
| 110 | 36 | 2525 |
| 80 | 33 | 3787 |
| 80 | 36 | 3472 |

※マルチ張りは土壌水分があるときに行う

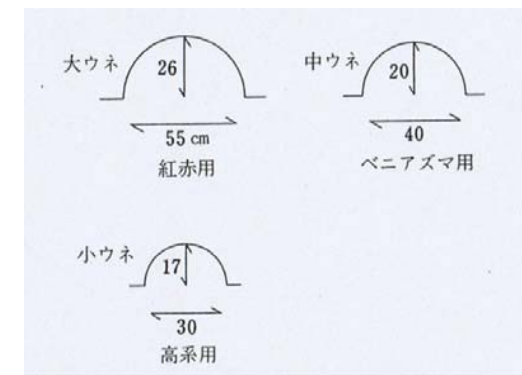


図1 品種に応じたうねの大きさ

4 施肥

- (1) 窒素：4～8kg/10a
多施肥で「つるぼけ」すると、収量が激減し、食味も劣る。残存窒素を考量し、有機質主体の施肥とする。施肥量がすくなく、生育が劣ると、収量が減少し食味(甘み)も劣る。
リン酸：8～12kg/10a
品質の向上に関与している
加里：8～12kg/10a
光合成産物の転流をうながし、いもの肥大を促進する。やり過ぎで、丸いもの発生などがおこるが、窒素の3倍量程ではつるボケを防ぐ効果がある

| 施肥例(砂丘地) | | (kg/10a) | | | | |
|-----------|--------|----------|----|-------|-------|-------|
| 肥料の種類 | 総量 | 基肥 | 追肥 | チッソ | リンサン | カリ |
| (完熟堆肥) 注1 | (1000) | (1000) | | | | |
| 苦土石灰 注2 | 100 | 100 | | | | |
| かんしょ専用肥料 | 60 | 60 | | 3.6 | 7.2 | 6 |
| NK化成2号 | 15 | | 15 | (2.4) | - | (2.4) |
| 合計 | | | | (6.0) | (7.2) | (8.4) |

注1) 完熟たい肥は、つるぼけや皮色が淡くなるので前作に施用し、当該作では施用しない
 注2) 苦土石灰は、pHが6.0以上のほ場では施用しない
 注3) 追肥(NK化成)は、砂土や地力の低いほ場でのみ施用する。(活着後、つる伸長が始まる前)。
 但し、マルチ栽培の場合は、かんしょ専用肥料100kg/10a(N:P:K=6.0:12.0:10.0)の全量基肥栽培とする。

5 植え付け

- (1) 遅霜の恐れがなくなった頃が適期。(5月中～6月上旬)
- (2) 低地温で活着がおくれると、いも個数が減少し、形状が不揃いとなるので天候を確認し定植する(5月中旬定植の場合)
- (3) マルチ栽培は基本斜め植えとし、乾燥時、苗が短い場合などは垂直植えとする
- (4) 高系14号では5～6葉苗を3節、ベニアズマでは7葉苗を2, 3節もぐして植える
- (5) 植え付け時、根が出る節は土中に埋めるが、葉は地上部に出す
- (6) マルチ栽培では晴天日はマルチ内の温度が40度にも達するので、雨天日や夕方植え付け、植え穴はふさぐ

さつまいも苗の植え方といもの着き方

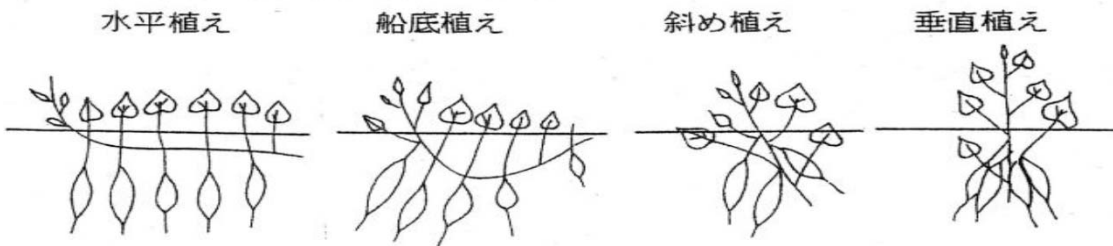


図2 植え方

6 生育期の管理

- (1) 地温が確保できれば、2～3日で活着する
- (2) 定植後1ヶ月の土壤水分、温度を保つことでいも数を確保する
- (3) 植え付け後40～50日は地表面が露出しているため、雑草が生える。ほとんどの雑草が耕耘・うね立て後10～20日で発生するため、植え付け前の除草剤散布が有効
- (4) 7月中旬に草勢を見て弱い場合、追肥を行う

7 病虫害防除

- (1) 実際の防除回数は、2～3回程度である。
- (2) 特にコガネムシ類による被害、商品価値を著しく下げするために重点的に防除をおこなう。7月中～下旬に粒剤を施用する
- (3) 乾燥年にはハダニが発生することがあるため、注意する
- (4) エビガラスズメやナガジロシバタなどは食害量が多い。食害が多いと、いものデンプン含量が低下するため発生が多いようなら早めに防除を行う

8 収穫～貯蔵

- (1) 植え付け後130日を目安に収穫する(十分デンプンが蓄積された時期)
- (2) 収穫は事前に試し掘りをして、大きさを確認してから行う
- (3) 果皮が傷つきやすいので、収穫は晴天日を選ぶ
- (4) 霜にあたったものは腐敗や貯蔵性が劣ることから、初霜前に収穫を終了する
- (5) キュアリングを行う場合は掘り取り後すぐに行くと効果的である
- (6) 貯蔵に適した温度は13度、湿度は90%(10℃以下で腐敗が進み、15℃異常で萌芽促進)
- (7) 収穫直後は乾燥による品質低下(柔らかくなる)に注意
- (8) 高温多湿条件では色ボケが出やすい。※いもの呼吸熱により温度が上昇する
- (9) キュアリングの効果は、表皮にコルク層を形成させ病原菌の侵入を防ぎ腐敗防止になり、また糖度が1～2度増す効果がある。
- (10) キュアリングは温度30～32℃、湿度90%以上で72時間程度行う



写真1 生育状況(7月13日)「盆栽型」



写真2 生育状況(7月26日)「畝間を覆う」



写真3 生育状況(9月13日)「うねの形がわかる」



写真4 いもの着生(高系14号)



写真5 貯蔵(石川県かほく市)



写真6 貯蔵(下田村)